品性論(一)

――近代日本における出発と展開――

諏訪内敬司

目次

一、はじめに
二、国語・漢和辞典における「品性」の説明
三、「品性」と類似語との比較
四、哲学・教育学辞典における「品性」の説明
五、character「品性」の日本への導入①
六、Charakter「品性」の日本への導入②
七、文部省における道徳教育の方針と「品性」
八、戦後の「品性」の使用状況
九、「品性」の説明の参考

一、はじめに

広池千九郎は『道徳科学の論文』第十四章冒頭の第一項第一節のタイトルで、「モラロジーは品性完成の科学」であるとうたい、[1] 品性完成を最高道徳実行の個人としての究極目標としている。しかし、『論文』では、必ずしも明確に概念規定が与えられているとは言いがたい。[2] これは後に述べるように、明治以降第二次世界大戦までの日本では「品性」という言葉・概念が広く普及しており、いわば常識化しているのであえてその意味を説明する必要がないと考えられたからではないかと想像される。

この小論では、品性陶冶・品性完成を目標にする道徳教育論は、日本でいつ頃から、どういう形で出発したの

か、その中でモラロジーの品性完成論はどのような特徴をもち、道徳教育論の中でどう位置付けられるのかを文献を探りながら論及する。さらに、広く欧米の道徳教育学、道徳哲学の中での位置付けを試み、「品性概念」の研究を目指そうとするものである。第一回目は、日本における「品性」という用語の発生と展開を概括的に論ずる。

二、国語・漢和辞典における「品性」の説明

まず初めに、日本における「品」、「性」および合成語としての「品性」という用語の意味を、それぞれ戦前戦後の代表的な辞典類に見てみよう。

(一)「品」:

○『大字典』(講談社、一九一六年)　多人数まちまちの義。転じて種類・物件・階級・区別・物品等の義。

○『広辞苑』(第三版、岩波書店、一九八三年)　①しな。しなもの。②たぐい。種類。③その物のねうち。くらい。人がら。④物のよしあしの程度。また、それを定めること。

○『日本国語大辞典』(小学館、一九七五年)　①種類。品種。しな。②人や物事にそなわっている品格や品質。イ品位。品格。風格。ロ品質。③略

○『大漢和辞典』(修訂版、大修館、一九八四年)　①しな。ア もの。もろもろのもの。〔説文〕品、衆庶也、从三口。〔段注〕人三為衆、故从三口。イ たぐい。いろ。種類。〔疏〕三品者、三色也。ウ がら。たち。品格。標格。エ わかち。差別。等級。②しなわけをする。等差をつける、区別する。③しな定めをする。品評する。④しなごとに。あまねく。みな。⑤官秩。品秩、官位。⑥かず。定数、定限。⑦のり。常、法則。⑧略。⑨ひとしい。又、ひとしくする。⑩〜⑬略。

これらの説明に共通しているのは、「品」は第一に「もの」を意味し、転じて「もの」の価値や人間の質や価値という意味が付与されて使われている、ということである。さらに転じて、等級づけや官位にまで広がった意味をもっていることがわかる。

(二)「性」:

○『広辞苑』　①うまれつき。天性。②物事の性質・傾向、③④略。

○『日本国語大辞典』　①うまれつき。もちまえ。天から与えられた本質。たち。さが。天性。②こころ。心の作用、本体。理性。③④略。

○『大漢和辞典』　〔1〕①さが。うまれつき、人の天賦。〔説文〕性、人之易气性、善者也、从心生聲。〔中庸〕天命之謂性。②もちまへ。物の本質。〔廣雅、釋詁三〕性、質也。〔疏〕性、謂本性。③生命。④いきる。生活。⑤姿體。形貌。⑥〜⑧略。　〔2〕心がうごく。①〜②略

「性」はものや人に生れつき(天から)与えられた本質、もちまえ、という説明である。

(三)「品性」:

○『大字典』　人の具有する性質の総称。又意志の義。

○『大言海』(冨山房、一九三五年)　〔人品性質の略〕人の生れつきにもちをる性質。又、人の行為の、一定の法則に統一せられて不変なるもの。

○『広辞苑』　ひとがら。人品。人格。〔哲〕性格を道徳的価値としてみる場合の呼称。

○『日本国語大辞典』　①人柄。人品。人格。多く、道徳的な基準で見る場合にいう。②すぐれた人柄であること。

○『大漢和辞典』　人がら。人格。人品。〔出典例なし〕熟語：品性陶冶

上の説明から、「品性」には二つの使われ方があることがわかる。一つは価値中立的な意味で人の性質を示し、もう一つは道徳的に望ましい人柄に使われる。『大漢和辞典』に出典例がないということ、また熟語として「品性陶冶」という日本の教育界で使われている言葉しかないのをみると、もともと「品性」は中国語になかった言葉であった可能性が強い。(3)

三、「品性」と類似語との比較

次に、品性の意味概念をより明確化するために、品性と似た言葉である「品位」「品格」「性格」「品行」についても探ってみよう。

(一)「品位」：

○『大字典』　しな。くらゐ。

○『広辞苑』　①品格と等位。②略。③人に自然にそなわっている人格的価値。ひん。

○『日本国語大辞典』　①品格と地位。また、人にそなわる清廉高尚な人格の特質やその位置。②～④略。

○『大漢和辞典』　①がら。ねうち。品格。〔唐書、百官志〕其品位既崇、不欲軽以授人。②金銀の地金、又は金銀貨幣の中に含有する他の金属の割合。熟語：品位田、品位封、品位之尊。

「品位」にはものの価値や、人間の地位という身分よりも価値的・道徳的な質を示す色彩がある。

(二)「品格」：

○『大字典』　しな。ねうち。ひとがら。

○『大言海』　①しながら。みえ。ひん。②けだかきこと。又、ひとがら。気品。

○『広辞苑』　①物のよしあしの程度。しながら。②品位。気品。

○『日本国語大辞典』　①物の性質のよしあしの程度。品柄。品質。②身分や位・格式。③品位。気品。

○『大漢和辞典』　しながら。ねうち。品位。〔韓愈、畫記〕與二三客、論畫品格。

このように、「品格」は「品位」と同様に、ものや人の質を指す場合に使われる言葉である。

(三)「性格」：

○『広辞苑』　①品性。ひとがら。各個人に特有の、ある程度持続的な、感情・意志の面での傾向。②広く事物に特有な性質・傾向。

○『日本国語大辞典』　①その人固有の性向、性質。感じかた、考えかた、行動のしかたなどに現われる、その人特有の性向をいう。もちまえの特質。キャラクター。②事物に備わった固有の性質。そのものに備わる在り方の本質的特徴。

○『大漢和辞典』　其の人特有の性質。もちまへ。気ぐらゐ。たち。性質品格。品性。

(四)「品行」：

○『大字典』　おこなひ。行状。熟語：品行方正、品行端正。

○『広辞苑』　おこない。行状。操行。

○『日本国語大辞典』　道徳的な基準から見た、おこない。みもち。行状。ふるまい。

○『大漢和辞典』　おこなひ。身もち。品状。〔福恵全書、莅任部、待紳士〕有文章品行之士、特加優遇。

このように、「品行」は単なるおこないというより、道徳的な側面からみたおこないを意味する場合がある。

以上の説明を総合すると、「品」のつく言葉が人間に使われる時には、道徳的な意味が込められている、と言うことができよう。「品位」や「品格」は人間の価値的な質を示しており、「品性」に近い。「品格」はものの場合にも使われるが、人間の場合には「品位」に近い。「品行」は単なる精神ではなく、道徳的な行為、道徳的ふるまいを示すことがわかる。「品性」も「品行」と同様に、価値中立的な使われ方と、道徳的使われ方とがある。いずれにせよ、「品性」とその他の言葉との違いはさほど明確ではないが、ある時期に「品性」が道徳教育の中で定着したと思われる。一方、「品」のつかない「性格」は個人特有の性向性質を意味しており、価値中立的である。

四、哲学・教育学辞典における「品性」の説明

次に、言語的な定義から踏み込んで、哲学・教育学関係辞典類にみられる「品性」の概念規定に当たってみよう（年代順）。

三宅雄次郎閲、徳谷豊之助・松尾勇四郎著『普遍術語辞彙』（敬文社、明治三十八年）では、「品性とは個人に属し、その人の実行的行動及び実行的思想を支配し又は規定する一定の傾向を伴うその人特有の性情心意の質を謂う」「品性と謂うとは、之を要するに、其の人の真相を外面に表示する一定の傾向性（傍線引用者）にして、吾人の価値の観念によって判断せらるゝその人特有の心的質性を謂うのである」[4]と説明され、品性の主な構成要素として天賦性、遺伝性（身体的、精神的）、習慣性、教育によって涵養される精神的発達性が挙げられている。

『教育大辞典』（同文館、明治四十一年、真田幸憲執筆）では、「品性の原語（引用者注：ギリシア語 χαρακτήρ）は、元来木竹金石等に彫刻せる画像の意義を有す」[5]とし、主に三つの使い方が挙げられている。すなわち、①一

定の主義によって言行する意志の強固な状態、②常に斉一的行動を継続した結果意志の習慣が確立し、どのような時と場合でも同一の行動をなすことができる意志の状態、③各個人の天性、自然の傾向、心意作用の個別的特性において認められるもの、の三つである。これらを総合すると、「品性」とは、一定の主義によって斉一的に行動し、意志の習慣となった状態である。そして品性の主な要素として、身体、気質、道徳的知識、趣味、感情及び欲望、意志を挙げている。つまり、この説明では、心身共に道徳に沿った行動ができるという人間の理想の姿を「品性」をもった人としているのである。

『哲学大辞典』（同文館、明治四十五年、中島力造・豊島要三郎執筆）では、「思想・感情・行動が常に統一を有し、終始矛盾なくして明瞭なる個人性を有する人は品性を有すると称せらる」[6]としている。すなわち品性とは、どのような場合にも必ず一定の行為をすることができるような心の傾向であるとする。その発生要因として、①心の生得的傾向（気質）、②人為的傾向　a外部から受けた教育によって生じた傾向、b自ら発憤し、自己の意志によって修養して作った傾向、を挙げる。行為との関係では、品性は行為と密接な関係をもつとする。また、「聖賢と凡愚との分かるゝ所、成功者と失敗者の分かるゝ所は皆、善品性の確立せると否とに在るなり。善品性の人生に必要なること斯くの如し」[7]と、品性の重要性を強調している。

篠原助市『教育辞典』（宝文館、大正十一年、増訂版昭和十年）では、「精神の一定の働き方を示し、狭義には意志の一定の傾向を指す」[8]。品性の要素として、①事物の価値に関する実践的判断、②価値に対する感受性、③実行の意力―障害に遭遇しても容易に屈することなく、耐久持続外に向かって能く奮闘し、内に向かって能く節制する意力が品性の中心要素であると、意志が品性の中心であることを説く。これらの要素が「自我に於いて緊密なる統一を保持し、漸を追うて、固定するとき、茲に品性は次第に確立す」[9]るのである。

『教育学辞典』(岩波書店、昭和十一年、高山岩男執筆)では、「道徳的見地より見られた性格」[10]を「品性」としている。性格とは個人の意志・行動・態度等を通じて前後一貫した確固たる特色を指すものである。個性は与えられたという意味をもつのに対し、性格は単に与えられたものではなく同時に育成されたという意味をもつ。性格のこの育成の原理が道徳であるときに「品性」といわれる。このような意味において品性は何等変化しない固定的なものではなく、自然的環境においても人間的環境においても変容生長する。どのような行為をなすかは、どのような品性であるかに依存する。つまり、品性は行為をなすもとになるものであり、同時に行為の積み重ねが品性を作っていくものとされる。

以上が戦前の説明である　これらの説明は主に、ドイツの教育学者ヘルバルト(及びそれに影響を与えたカント)思想の解説になっている。[11]その中でほぼ共通の要素として以下の点が挙げられよう。

①「行動、思想を支配・規定する一定の傾向を伴うその人特有の性情心意の質」

②「一定の主義によって言行する意志の強固な状態」

③「一定の主義(実践原理)によって、常に一定の思想・感情・行動・態度をとることのできる意志の習慣化した状態(心の傾向)(=性格)を道徳的に見た言葉」

戦後の説明の代表例は以下に掲げる。

小林澄兄『教育百科辞典』(福村書店、昭和二十九年)によれば、「原語(Character)は性格とも称されるが、性格とは、個人の意志、行動、態度等が前後一貫して確固たる特色を有することをいい、品性とは、道徳的見地

から見られた性格をいう」。[12]そして、個性は生まれながらに与えられたものなのに対して、性格は後天的に形成されていく。その性格が道徳的に形成されるとき品性になる、という説明である。

『教育学事典』(平凡社、昭和三十一年、篠原助市執筆)では、十八世紀の哲学者カントは、「品性を有するとは自己固有の理性がしめす一定の実践的原理にしたがってみずからを拘束する主体の意志の性質を意味する」[13]とした。こうしてカントは品性を①感覚的な経験的なものと、②思惟的な叡智的なものとにはっきり区別した。カントの影響を受けたヘルバルトは、品性を「人がみずから意志するところのものである」とし、ツィーグラーは「いっさいの習慣と練習、いっさいの獲得的性向、意志の格率の総和である」とした。また、ヴィンデルバンドは、経験的品性と叡智的品性とは意志のふたつの考え方にすぎないとした、とある。

栗田賢三・古在由重編『岩波小辞典　哲学』(昭和三十三年)では、品性の説明はなく、「品性→性格」とし、性格の説明として、「1)個人に特有な、ある程度まで持続的な、行動の仕方。その人の個々の性質でなく、その人の全体としての心理的特質をさすもので、先天的の気質に後天的な影響が加わったものと考えられる。狭い意味ではとくに個人の意志的方面の特質をさす(この場合は品性ともいう)。2)自分の原則に忠実で首尾一貫して動かない意志的態度。3)略」[14]と、心理的特質の中で一定の意志に従って行動するとき「品性」と表現される、という説明である。

さらに、大島康正編『新倫理辞典』(創文社、昭和三十六年)では、「品性というときには特に、生まれつきの身分・地位から一応離れて、そのひとのひとがら、またそのひとにそなわる道徳的価値を言う場合もある」[15]という。品性は単に抽象的な道徳的価値だけではなく、からだつき、顔つき、ものごし、すがたとも関係している、と説いている。

相賀徹夫編『教育事典』（小学館、昭和四十一年、佐藤俊夫執筆）では、人品性格をつめた言葉とし、「人がら」「ひととなり」、というほどの意味であるとしている。[16] そして、人間の心の働きを知・情・意と分けると、とくに情・意の面についていうことが多いとし、品性と道徳性とをほとんど同義に扱っている。

以上のように、戦後の説明でも戦前のと同様に、「常に一定の考え、行為のできる心の傾向や意志」という点が共通している。さらに、心理学的意味での「性格」がとくに道徳的に形成されたものを「品性」と呼ぶ傾向が強くなっている。なお、心理学辞典やその後の教育学辞典では、「品性」は説明されていない。このことは、心理学や現代の教育学では「品性」は正面切って論じられない傾向にあることを物語っていると言えよう。

五、character「品性」の日本への導入①

(一)訳語の模索

以下に見られるように、「品性」という言葉は英語の character（ドイツ語 Charakter）が訳された和製語のようである。character はもともとギリシア語 *χαρακτήρ* に由来するが、[17] 日本に character なる語が入ったのは、高野長英が兵法書の翻訳で、オランダ語 karakter を形状と訳したことに始まるとされる。[18]

character が何故「品性」と訳されたのか、その源を探ると、明治時代に作られた和製語である可能性が大きい。江戸末・明治初期の英和辞典に見られる character の訳語をみると、例えば、

○幕府洋書調所『英和対訳　袖珍辞典』（文久二年〈一八六二〉江戸開校）　徴（シルシ）、文字、記号、性質、紀事、名誉、行状、表題、活字

○堀達之助編『英和字典』（全国新館社、明治三年）　文字、記号、徴（シルシ）、名誉、人物、品行

○『附音挿図　英和字彙』（官許、明治六年）　文字、記号、筆跡、字体、性質、品格、名誉、行状、表題

○市川義夫纂訳、嶋田三郎校訂『英和和英　字彙大全』（如雲閣蔵版、明治十八年）文字、記号、筆跡、字体、性質、品格、名誉、行状、表題、a good character 芳名

等となっている。以上から大別して、①文字、記号、筆跡、しるし、②性質、品格、品行、行状、に分類できる。また、この頃はまだ「品性」という訳語はあてられず、模索状態であったことが窺える。

(二)「品行」の普及

中村正直（敬宇）は『西国立志編』（明治三～四年、同人社蔵版：木版本、Samuel Smiles, *Self Help*, 1859, の翻訳本）において、character を「品行」と訳している。すなわち、

第十三編　品行を論ず、すなわち真正の君士を論ず

「人この世にある、真世の権勢と称すべきものは品行なり」。「けだし品行の善なるものは篤敬正直にして、事を処する必ずそのよろしきに合うに在り」。「この品行は、別に天禀の才を要せず、他人の助けを要せず、人々自己に修め得らるべきものなり」。[19]（傍線引用者）

と、品行（character）の重要性を強調している。そして、その中核は「言語の信実、行為の信実は、人の品行において、身体の背骨あるがごとく、これなければ立つことあたわず」であるとしている。また、品行の形成法に

ついて、「人の品行は、善き習慣の力に頼ること細々ならず」「人の品行は真実善良の徳あるをもって本となす」としている。この書は明治青年の立志を論ずるものとして、福沢諭吉の『西洋事情』に並ぶほどのベストセラーとなる。[20] 明治十年には改正して活版印刷に付されている。そこで、「品行」なる語はかなり知れわたるようになったと思われる。しかし、「品行」とは何を意味するかについて定義や説明が明示されていないので、十分な概念を伴った言葉として当時の国民にどの程度定着したか疑問である。

(三)訳語「品性」の登場

前書が出版されて間もなくして、阿部泰蔵が『修身論』(明治七年一月、文部省、Francis Wayland, *The Elements of Moral Science*, 1835, の抄訳本)[21] で初めて「品性(意味ルビ：ヒトガラ)」という訳語をつけた。この書は原著約三六〇ページのものを木版本約三〇〇ページ、約六万二千字と縮小したもので、明治五年に公布された学制に従った下等小学二年級の修身口授(ぎょうぎのさとし)の教科書として使用されるようになる。[22] しかし、文部省の教育方針変更に基づき、修身科の重視と西欧思想(翻訳教科書)の排除によって明治十三年九月に不適格書に指定されて教室から排除されているので、「品性」の定着にはそれほど大きな力をもったとは思われない。

阿部は後編第四章「品性を論す」において、品性 character を「其精神此の如く其才能此の如く此器量此の如く信する所の道は此の如く習慣は此の如しと現今見る所の形状」[23] と定義する。しかし、この定義では意味が十分に伝わらないので原文を忠実に訳すと、以下のようになる。「キャラクターとは、個人の現在における知的、社会的および道徳的状態のことである。これは、その人間の習得したもの、能力、習慣、傾向性、道徳的感情、およびその人間の現在の状態に含まれるすべてのもの、もしくは将来におけるよい状態を作り出す力を意味する。この

意味で、キャラクターは、人間が自分のものと称しうるすべての所有物の中で、断然最重要のものであることは、論ずるまでもないほど明白である。これは、人間がこの世の中で被ったり楽しんだりすることの源泉であり、また、後の世で恐れたり望んだりするすべてのものの源泉である」。その特質として阿部は、「現世の楽は皆品性より出て未来に於て楽を得るの亦品性に由るのみ」とする。したがって、他人に施す益の最大のものは、他人の品性を改めることにある、という。つまり、品性が人に幸福をもたらすと、その意義を強調しているのである。

また、後編第七章「親の職務及ひ其権を論す」では、親の職務の要件の第四「修身の教育」に於いて、「品性の善悪は大いに幼少の時修身の教育に関係する者にして、畢生の苦楽も亦之に因ること固より論なし」[24](傍線引用者)と、幼児期の教育によって形成されるとしている。

阿部が何故「品性」という訳語をつけたか不明だが、「品性を考え出すヒントが、中国の古典に見られる。それは「性三品説」(『辞海』上海辞書出版社、一九七九年)という考え方である。『辞海』によれば、西漢の董仲舒(前一七六—一〇四)が『春秋繁露』巻十において、人の性を上中下の三つに分けて把握した。「上、下、中(善、悪、中)三等、有所謂〝聖人之性〟、〝中民之性〟和〝斗筲之性〟的区別。主張〝名性不以上、不以下、以其中名之〟。因為〝中民之性〟是可上可下、可善可悪的須〝性待漸乾教訓、而后能為善〟」。唐の韓愈(後七六八—八二四)は「原性」(『唐宋八家文 上』)においてこの考え方を再提出した。「性也者、與生俱生也。情也者、接於物而生也。性之品有三。而其所以為性者五。情之品有三。而其所以為情者七。曰、何也。曰、性之品有上中下三」と性に三つの品があるとした。そこでは「性之品」と表現されているが、これが「品性」となった可能性がある。江戸から明治初期にかけて、韓愈はかなり読まれていたようであるから、彼の影響力は大きいと推測される。しかし、「品性」という言葉はすぐには定着しなかったようである。

例えば、西　周は「国民気風論」（『明六雑誌』三十二号明治八年三月）において、national character を「国民の気質ないし気風」という意味でとらえている。西は character を個人のレベルから、個人の集合としての国民に応用して論じている。

中村正直は『西洋品行論』（珊瑚閣、明治十三年、Samuel Smiles, *Character*, 1871,の訳本）においても再び、character を「品行」と訳している。この時期に発行された東京大学三学部印行『哲学字彙』（明治十四年四月）では、Character は「品格」、「性質」、「行状」と説明されており、「品性」は入っていない。

倫理学者の大西　祝は「徳育について一言」（『学林』六号、明治二十三年七月）において、カラクテルを品格とし品性（筆者注：ἦθος）と使い分けている。「有徳の品性を作るには元来の性質が之に障害を与える場合には其性質を矯め直さねばならぬ、又矯め直して成り立った品性が確固として居なくば之を其品格と云うことは出来ぬ」[25]。すなわち、元々の性質を鍛え直したときに「品性」が成立し、「品性」が確固と揺らぎないものになったとき「品格」になるとされている。大西においては、品性は品格よりも道徳的に低い位置におかれていた[26]。

以上のように、明治中期までは character の訳語は確定せず、「品性」「品行」「品格」等が使われていることが分かる。

(四)訳語「品性」の定着

ところが、明治中期以降のスマイルズの訳本では、character が「品性」と訳されるようになった。例えば、津軽純夫訳述『品性論訳解』（門部書店、明治三十五年発行〈大正二年までに訂正十三版〉）は原著のうち、訳者が重要と判断した部分を翻訳したもので、character を「品性」と翻訳している。また、スマイルズ原著、若月保治・

栗原元吉訳述『職分論』（内外出版協会、明治三十八年、〈松本商会出版部、大正六年〉）でも「品性」が使われている。

竹村修訳『品性論』（内外出版協会、明治三十九年〈松本商会出版部、大正六年改訳十八版〉Smiles, *Character*, の翻訳本）でも、「品性」と訳されている。ここでは品性の形成法として、性質、身体の健康、家庭的または幼児の育て方、友達の種類、個人の克己・修養力を挙げている。品性を人類の最も高尚なる権化、即ち人間の最も高貴な紋章であるとし、さらに、人間を神聖にし、人間を評価し、社会の良心を形作り、社会の最大の原動力となるものである、と性格づけている。ただ、歴史、伝記、個人の経験から材料を集めて青年に感化を与えようと意図しているが、個々のものはそれぞれに影響を与えても、品性形成の具体的方策は体系的に論じられていない憾みがある。「品性は世界に於ける最大原動力の一なり。其最も高尚に権化する所、人性を其最も崇高なる形に於て例証す。」「人の真の品性は、其人が記者として、或は雄弁家として、或は政治家として、公然世に顕はるゝ所に由るよりも、寧ろ其親近なる人々に対する行動及び日常の平凡なる雑事を処理する所に由りて、吾人は更に一層能く此之を理解し、評価することを得るものなり」。さらに、国民の品性をも論じる。品性の根本要素を意志と克己であるとした。しかし、スマイルズ自身原序で「人の品性（キャラクター）とは疑ひもなく、其定義多かる可し」と、品性の定義の困難さを告白しているように、スマイルズによっては、「品性」の明確な概念規定は与えられなかった。

この他、『大日本百科辞典』（同文館、明治四十五年）とスマイルズ原著、山懸悌三郎訳『自助論』（内外出版協会、明治四十五年三月）でも character は「品性」となっている。清水起正・吹田佳三訳註『キャラクター講義』（北星堂書店、大正六年〈同九年までに十五版〉）では character に訳語を付けずにそのまま用いている。註として character を「立派な品性といふ意味に解して置かれればよかろうと思う」と述べられている。

以上のように、明治時代中期から大正時代にかけて、英語のcharacterの訳語は「品性」が定訳となった。この訳語の定着には、次項で扱うヘルバルト教育学の影響が大きいと思われる。

六、Charakter「品性」の日本への導入②

教育の必然的目的を強固なる道徳的品性（Charakterstärke der Sittlichkeit）としたのは、十八～十九世紀に活躍したドイツの教育学者ヘルバルト（Johann Friedlich Herbart,一七七六～一八四一）である。ヘルバルト教育学を日本へ最初に紹介したのは、明治二十年から帝国大学教育特約科で教育学を講じたハウスクネヒト（Emil Hausknecht）である。また、ドイツ留学から帰国した野尻精一は、明治二十三年より高等師範学校でヘルバルト教育学を講義している。しかし、Charakterをどう説いたか記録がない。同二十年代よりヘルバルトの思想は後継者のケルン、リンドネル、ライン等の翻訳書や解説書の出版によって本格的に紹介される。

ケルンの著書は、山口小太郎訳注『教育精義』（普及舎、明治二十五年）として翻訳出版される。同書の六十二節「品性ノ主観的客観的部分」で、「教育者ノ最終目的タル品性ハ道義的ナラザルベカラズ」[27]と品性が教育の最終目的であり、しかもそれは道徳的でなければならない、とされた。

ヘルバルト学派の考えを広めたオーストリアのリンドネル（Gustav Adolf Lindner,一八二八～八七）の原著を日本風にアレンジして出版した湯原元一訳補『倫氏教育学』（金港堂書籍、明治二十六年、同三十三年〈十五版〉）では、教育の目的を品性形成である、と説いている。そして、人間の品性とは「意志行為の定形、即ち一定の主義により言行する意志の強固なる状態」[28]であるとする。つまり、自分の中に思考や行動のしっかりした基準が出

来た状態である。品性を完全にする条件として、①意志や行為において、一定の主義に出る習慣を養成する、②種々の主義の軽重に一定の順序をつけること（価値の序列化）を挙げる。さらに、品性の総合的定義としてリンドネル（湯原）が説くのは、「軽重相統率する道徳上の系統に遵由する所の総ての意志、総ての行為の完全なる前後の協同」である。そして、「総ての道徳主義、悉く道徳法と一致し、而して道徳法の根底たる良智、之が指導に任ずるときは、品性は、道徳的の品性と称す」[29]と、品性が道徳律と結び付けられた道徳的品性は、人間精神発達の最高目的であるという。さらに、ヘルバルトは道徳的品性を客観的なものと主観的なものに分けたと説明する。客観的品性は自然や教育によって獲得される品性で、その形成要素として、①人間の天禀、②教授、習慣、訓練、交際、社会の影響を挙げる。主観的品性は客観的品性を生徒が自力によって、更に自己の内心を修め、自識的に発達するものであるとする。

全国の師範学校の八割がこの本を教科書として使用していることを考えると、「品性」という言葉は教育界に広く普及したと思われる。[30]

ヘルバルト主義の推進役となった一人、教育学者谷本富は例えば、『科学的教育学講義』（六盟館、明治二十八年）において、「凡そ品性とは意志と行為と相合して画一なるを云ふなり。具さに論ずるときは、客観的側面と主観的側面とあり。客観的側面と云ふは、品性の根底たるべき意志其の者を謂ひ、主観的側面とは之に制裁を与ふる者を謂ふ」。「道徳的品性は此の主客両観部の成就したる品性、即ち人格ある品性にあらざれば見るべからず」。「道徳的品性とは、其の意志強健剛毅にして、良心の命令を断行することを得るを謂ふなり」[31]と、ヘルバルトの説を紹介している。

このほか、ライン原著、湯本武比古訳『ラインの教育学原理』（紅梅書店、明治二十九年）でもCharakterを品

性・性質、Charakterbildung を品性育成と訳している。また、リンドネル原著、湯原元一抄訳『倫氏教育学教科書　全』（金港堂、明治三十八年）でも、道徳的品性が教育の目的として掲げられている。

こうして、「道徳的品性の陶冶を以て、教育至極の目的としたるは、実にヘルバルトとす」（『教育大辞典』同文館、明治四十一年）というように、日本では、品性陶冶が教育の究極目的に掲げられるという考え方がヘルバルト教育学の普及と共に広まった。そして、この考え方が「儒教主義の道徳観念と合致し、又明治十三・四年以来文部省が唱導した忠孝主義の徳教と一致する」[32]とみなされる。リンドネルの説を解説した湯原は「ヘルバルトが五個の道徳的概念（引用者注　五道念＝内心の自由、意志の完全、好意〈仁愛〉、正義〈権利〉、報償〈衡平〉）は其の大体に於いては、我が聖勅と相符合するが故に、我が邦の倫理教育に於いて、ヘルバルトの主義を採用するは、毫も不可なることなし否、独り不可なることなきのみならず我が聖勅に学術の根底を与へ、之をして万世の下に伝らしむるものも、孔孟聖賢の教を除きては、亦此主義なり」[33]と、ヘルバルトと教育勅語を積極的に結び付けて説明した。つまり、竹中暉雄のいうように、「明治ヘルバルト主義は、勅語の諸徳目や儒教倫理と結合対比されるという形で宣伝され、とりわけ仁義礼智信という五常とヘルバルトの五理念とのアナロジーが強調された」[34]のである。

明治二十五年以降の教科書は、同二十四年十二月の「小学校修身教科用図書検定標準」に基づき、最初に徳目を掲げてそれを説明するための例話や寓話が配列される「徳目基本主義」が中心になるが、三十年代には人物基本主義が増えてくる。これはヘルバルト教育学の影響であるが、明治三十七年に国定修身教科書が使用され始めてから、「ヘルバルト主義の教育は衰退した」[35]。また、日清戦争（明治二十六～二十七年）以降、儒教倫理との共通性が指摘されていたヘルバルト教育学自体も、世界を視野に入れた「共同愛国」（井上哲次郎）には対応出来な

かった、とされている。その結果、ヘルバルト教育学はその教授法のみに関心が置かれることになる。あるいは、ヘルバルト主義は個人主義であるとして、明治三十年代には社会的教育学や自然科学的近代思想に基づく実験教育学が主流となったことも影響した[36]。しかし、大学や学問の世界で否定されても一旦広まった考えは教育現場ですぐに消えることはなく、「品性」という考えは一般国民の中に根強く残る。

「品性」がいかに定着したかを示す事例として、次のものが挙げられる。

○国木田独歩：「若し梅子嬢の欠点を言えば剛という分子が少ない事であろう。併し完全無欠の人間を求めるのは求める方が愚である。女子としては梅子嬢の如き寧ろ完全に近いと言って宜しい。或は剛の分子の少ない所が却て梅子嬢の品性に一段の奥ゆかしさを加えて居るのかとも自分は思う[37]。」（傍線引用者）

○夏目漱石：「三四郎は急に気を易へて、別の世界の事を思出した。――是から東京に行く。大学に這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の具つた学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる[38]。」（同）

○武藤山治は『実業読本』（日本評論社、大正十四年）で一章を品性の説明・強調に充てている。武藤の言うところでは、鐘淵紡績の従業員にスマイルズの『品性論』を与え、品性を磨くように奨励している[39]。

こうして、「品性」という用語はヘルバルト教育学の普及とともに、日本で広く使われるようになった。その訳語について、「『品性』及び『陶冶』等の語は、後に教育界の常識として通用するようになったが、最初カラクテルを品性、ビルデンを陶冶と訳したのは湯原である[40]」とされ、あるいは湯原自身「教育学上の術語で、今日一般に用いられてゐるものは、多くはヘルバルト主義の全盛時代に作られたものである。例へば、カラクテルを品性

と訳したのは私である。尺振八氏のスペンサーの教育論[41]には、この語を英語のクヲオリテイに充てゝある。これは品性といふ語の意味からいへば最も適当に使用されてあると思ふ。私のものは品格とも性格ともいへないからこの二語から一字づゝを採って、作ったもので、別に典故もない[42]」と述べている。しかし、既に指摘したように阿部や山口の方がcharacterを先に「品性」と訳している。湯原が典拠を持たないというのに対し、この二人が前述の「性三品説」を典拠にしているかどうかは不明である。

ちなみに、現代中国語辞典にある「品性」の説明をみると、代表的な『辞源』（商務印書館、北京、一九七九年）と『辞海』（上海辞典出版社、一九七九年）では「品格」「品級」「品位」はあるが、「品性」という言葉は説明項目に挙げられていない。台湾の『中文大辞典』（中国文化研究所、民国五十二年〈一九六三年〉）では、①心理学名詞。人之行為、依一定之法則統一而不変者、謂之品性。②猶謂人格、人品、とし、唯一の出典例として〔宋書、孝武帝紀〕簡約之風有孚於品性、恵敏之訓無漏於幽仄、が挙げられている。なお、「品性陶冶」の説明は「猶言人格之修養」となっている。また、『現代漢語詞典』（中国社会科学院語言研究所編、一九七九年）では、「pinxing 品質性格」となっており、日本でヘルバルト教育学の普及によって定着した説明が、中国語に逆輸入された形跡が窺える。[43]

七、文部省における道徳教育の方針と「品性」

「品性」の民間定着に比べ、公の中では俎上に上っていないことが、公文書に示されている。例えば、「教学聖旨」（明治十二年八月）では、「教学ノ要仁義忠孝ヲ明カニシテ智識才芸ヲ究メ以テ人道ヲ尽スハ我祖訓国典ノ大旨上下一般ノ教トスル所ナリ然ルニ輓近専ラ智識才芸ノミヲ尚トヒ文明開化ノ末ニ馳セ品行ヲ破リ風俗ヲ傷フ者

少ナカラス」（傍線引用者）と、儒教的道徳の衰退と欧米思想の流入によって日本固有の道徳が乱れたと指摘した後、「自今以往祖宗ノ訓典ニ基ツキ専ラ仁義忠孝ヲ明カニシ道徳ノ学ハ孔子ヲ主トシテ人々誠実品行ヲ尚トヒ」とされ、「品行」が使われている。また、西村茂樹『小学修身訓』（文部省、明治十三年四月）では、「第四・修徳」で、「人の品行に於いて身体の脊骨あるが如く。是なければ立つこと能わず」（立志編）「人の斯世に在る。真正権と称すべき者は品行なり。（後略）」（同上）とある。

「小学校教則綱領」（明治十四年五月四日）においては、小学初等科修身学科で「簡易ノ格言、事実等ニ就キテ徳性ヲ涵養シ兼テ作法ヲ授ク」と、「徳性」と表現されている。「幼学綱要」（明治十五年十二月）でも、「人天賦ノ徳性アリ然レドモ学バズシテ能ク道ヲ知ル者ナシ」となっている。

「小学校教則大綱」（明治二十四年十一月十七日）では、「修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キ児童ノ良心ヲ啓培シテ其徳性ヲ涵養シ人道実践ノ方法ヲ授クルヲ以テ要旨トス。（中略）児童ヲ導キテ風俗品位ノ純正ニ趨カンコトニ注意スヘシ」と、徳性と品位が使い分けられている。

「小学校令施行規則」（明治三十三年八月二十一日）でも同じように、「修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キテ児童ノ徳性ヲ涵養シ道徳ノ実践ヲ指導スルヲ以テ要旨トス尋常小学校ニ於テハ（中略）以テ品位ヲ高メ（後略）」と使い分けられている。

「宗教的情操ノ涵養ニ関スル次官通牒」（昭和十年十一月二十八日）になると、「三、学校ニ於テ宗教的教育ヲ施スコトハ絶対ニ之ヲ許サザルモ人格ノ陶冶ニ資スル為学校教育ヲ通ジテ宗教的情操ノ涵養ヲ図ルハ極メテ必要ナリ」と、新たに「人格」という言葉が出てくる。これには、大正時代に盛んになった人格主義教育思想が影響しているものと思われる。

「小学校令施行規則改正」（昭和十六年三月）では、「国民科修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キテ国民道徳ノ実践ヲ指導シ児童ノ徳性ヲ養と皇国ノ道義的使命ヲ自覚セシムルモノトス」と、再び徳性が使われている。

戦後では、「教育基本法」（昭和二十二年三月三十一日）第一条（教育の目的）において、「教育は人格の完成をめざし…」となっている。

以上のように、国の政策上は、「品性」については論じられなかった。それは、ヘルバルト主義運動と結び付いて、民間の教育現場（学校及び学校での教育を指導する東京帝国大学や東京高等師範学校等）で論じられていたと言えよう。

八、戦後の「品性」の使用状況

(一) character の訳語

スマイルズ原著、永井潜訳『自助論』（平凡社、昭和三十年、*Self-Help* の訳書）では「品性」が使われている。エマソン著、入江訳「自己信頼」（エマソン選集二『精神について』）（日本教文社、昭和三十六年）でも、character は「品性」となっている。ところが、スマイルズ原著、竹内均訳『向上心』（三笠書房、昭和五十八年、*Character* の訳書）や『続向上心』（同、五十九年）では、青年の啓蒙向けに、「人生を切り開く」といったトーンで意訳し、構成も入れ換えている。そして、character を「人格」と訳し、「品性」は使っていない。スマイルズ原著、竹内均訳『自助論』（三笠書房、昭和六十年）も同様である。

さらに、ジョン・ラボック原著、外山滋比古・岩元巌訳『ユース・オブ・ライフ―いかに生きるか―』（講談社、昭和五十五年、John Lubbock, *The Use of Life*, 1894, の訳書）では、「世の中に出て、成功するということ

だけを問題にするなら、なまじ利口なよりは人柄のよさ(character)と着実さを身につけているほうが役にたつ」「だが人格（character）というもの―じゅうぶんに練れた意志というもの―これがほんとうに世の中で役にたち、人間を救ってくれるものである」「あなたの人格とは、あなた自身でつくりあげるものである」[44]と、状況に応じて訳し分けられているが、「品性」は用いられていない。

(二) Charakter の訳語

ヘルバルト原著、三枝孝弘訳『一般教育学』（明治図書、昭和三十五年、Herbart, *Allgemeine Pädagogik*, 1806, の訳書）では、Charakterstärke der Sittlichkeit を「強固な道徳的品性」と訳している。稲富栄次郎『ヘルバルトの哲学と教育学』（玉川大学出版部、昭和四十七年）でも「品性」を使っている。このほか、三枝孝弘『ヘルバルト「一般教育学」入門』（明治図書、昭和五十七年）やヘルバルト原著、是常正美訳『教育学講義綱要』（協同出版、昭和四十九年、Umriss pädagogischer Verlesungen, 1835, の訳書）でも「品性」が使われている。

しかし、高久清吉『教育の英知―ヘルバルトと現代の教育―』（協同出版、昭和五十年）では、「道徳的性格の陶冶」、また『教育学大事典』（第一法規、昭和五十三年）でも「ヘルバルトは最初、教育の最高の目的は徳性の涵養にあるとした。徳性とは性格であり、意志である」「そして道徳的品性と多面的興味の二つが教育の目的を構成するものとした」（「ヘルバルト」細谷俊夫執筆）と、まちまちである（傍線引用者）

(三) 「品性」のその他の使用例

高校の社会科の教科書十種類以上の内、三省堂版『現代社会』（改訂版、昭和六十年）に「品性」が扱われてい

る。すなわち、「自己をつくる」という節で「品性ある人間に」という項目の下に、「美しいものに感動し、善なるもの、崇高なものを感受することによろこびを見いだす高尚な感性を、品性とよぼう」と定義づけする。この定義では判断力の介在がないが、品性の形成には意志の力が不可欠であるとしている。

国際テニス連盟（ITF）がソウル五輪のために定めた競技規則を紹介した新聞記事で、「スポーツ選手としての品性を守り、清潔で違和感を持たせない服装をすること」[45]とある。また、イギリスの大衆紙「スター」と「サン」が日本の天皇陛下攻撃の記事を掲載したことに対し、日本の外務省が抗議したが、両紙は反論した。これについて「毎日新聞」は、「これは全く新聞の品性の問題であり、この両大衆紙に品性を求めることは初めから無理な注文である。品性下劣な人間に『おまえは下劣だ』と言っても、彼らは痛くもかゆくも感じないだろう」という特派員の記事を載せている。[46]

九、「品性」の説明の参考

まず、明治後期の倫理学者吉田静致は、品性完成に向けた意志と行為の関係を分かりやすく説明している。[47]吉田によれば、「品性とは有意的動作即ち行為を度々繰返す事に依って生じたる一定の習慣性」で、「言換れば、一定の品性ありといふことは或る一定の行動をなす傾きが出来て居ると云ふ意味」である。（傍線引用者）

次に、品性、意志決定、行為の関係については、品性を基本とし、意志の自由決定によってどう行為するかを決める、と説明している。つまり、「品性＋意志決定＝行為」と見るのである。従って、品性が高くなければいくら強い意志を働かせても道徳的に高い行為とはならないことになる。さらに、過去の行為が品性形成にどう結び付くか、あるいは影響するかについて、或る行為が、過去の品性に結び付いて、更に新しい品性を作り出す、と

言う。新しい行為をする度毎に、それが今までの品性を高めたり低めたりすると言うのである。こうして、品性は過去の行為、意志活動の全体の結果として生じて来たものである、とする。このような「総果たる品性が、今度は基本となって、将来の意志活動を為すに至る」。そこで、品性を簡単に定義すれば、「過去の意志活動の総果にして将来の意志活動の根拠なり」となる。そして、新たに意志活動した事が、今までの意志活動の結果に加わって、更に品性を改変して行く。こうして品性が徐々に発展変化して行くという。そこで、品性は、一方では、意志活動によって作られたものであると同時に、他方では、意志活動を生ずる根底でもあるとする。

教育学者入沢宗寿は[48]品性の内容を、①道徳的価値を識別する判断（知的要素＝善いものを善いと識別判断する力）、②道徳的価値に関する直接の感受性（感情的要素）、③遂行の力（意志の堅固＝善いと判断した方向に実行する力）、から構成される、と説き、品性の中核に情操があるとしている。

戦後では、矢内原忠雄の説明「人間形成について」（『講座　現代倫理』第八巻、筑摩書房、昭和三十三年）がみられる。矢内原は人格（personality）と混同してはならない類似の概念として、品性（character）、品行（behaviour）、気質（temperament）を挙げ、それぞれについて以下のように説明している。

すなわち、「人格」は人間の本質をなすもので、それは性質上普遍的であり、万人に共通してあるという。すべての人間は人格として平等かつ自由であると、「平等な人格」という戦後の民主主義の考え方を述べる。「品性」は人格が個々の人によって具体的な道徳的性格を帯びたものとし、それは性質上個別的であるとする。従って、品性には優劣があるという。「品行」は品性が個々の行動として外に現れたものであり、従って、品性よりも更に個別的・具体的である。「気質」は身体的条件の影響を受けている心の状態であって、快活、怒りやすい、神経質、等の個人的特徴の更に強い性質、とする。

馬場文翁は『道徳教育の研究』（福村出版、昭和四十年）第二章「品性の陶冶」[49]で、品性の教育について論じている。第二節で、品性は行為だけでなく、遺伝と環境に由来する部分もあるとする。しかし、遺伝や環境に恵まれなくても、自己の教育と修養を意識して感心な行為を繰り返して行けばよき品性をもたらすことは可能であると説いている。

これらの説明は、モラロジーの品性完成の方法を考える際のヒントになると思われる。すなわち、遺伝や環境に左右される部分もあるが、本人の意志や努力次第で道徳的価値を知り、その価値を素晴らしいと感じる力の上に、実行する強い意志力を発揮して実行していく積み重ねが品性完成に近付く道になる、というわけである。

〈注〉

(1)広池千九郎『新版　道徳科学の論文』（以下『論文』と略す）第七巻（広池学園出版部、昭和六十年）三頁
(2)広池千九郎『論文』における「品性」の考え方については、別稿で論じたい。
(3)本稿五、参照
(4)三宅雄次郎閲、徳谷豊之助・松尾勇四郎著『普通術語辞彙』（敬文社、明治三十八年）六三〇～一頁
(5)『教育大辞典』（同文館、明治四十一年）一三〇八頁
(6)『哲学大辞典』（同文館、明治四十五年）二四五七頁
(7)同上
(8)篠原助市『教育辞典』（宝文館、大正十一年、増訂版昭和十年）七八七頁
(9)同上書、七八八頁
(10)『教育学辞典』（岩波書店、昭和十一年）一九七一頁
(11)本稿六、参照
(12)小林澄兄『教育百科辞典』（福村書店、昭和二十九年）八三〇頁
(13)『教育学事典』（平凡社、昭和三十一年）一一八頁
(14)栗田賢三・古在由重編『岩波小辞典　哲学』（昭和三十三年）一〇六頁
(15)大島康正編『新倫理辞典』（創文社、昭和三十六年）二九七頁

(16)相賀徹夫『教育事典』（小学館、昭和四十一年）二八八頁
(17) χαρακτήρ の元来の意味とその変遷については別稿で論ずる。
(18)高野長英『三兵答古知幾巻二十』（一八五〇年）「故に其主将其時の形勢を考へ吾隊の気質〈ケースト〉と敵兵の形状〈カラクテル〉を測り…」（『高野長英全集』第二巻、〈高野長英全集刊行会、昭和五年〉二六〇頁）
(19)サムエル・スマイルス著、中村正直訳『西国立志編』（同人社蔵版、明治三～四年）講談社学術文庫、昭和五十六年、四九五頁
(20)「これを読まぬと西洋精神を談ずべからず。新日本富強の道がこゝにあるといふのでこれを読むことの早きを誇り合った」「恰好の修養書を欲していた諸学校では、これを教科書にしたので、幾ばくもなく全国都鄙に行き渡った」（柳田泉『西国立志編』「解説」昭和十三年、冨山房）
(21)海後宗臣編『日本教科書大系　近代編第三巻　修身(三)』（講談社、昭和三十七年）参照
(22)ウェイランドの抄訳本は、阿倍の抄訳本以外に数種類出版された。
(23)海後宗臣編『日本教科書大系　近代編第三巻　修身(一)』（講談社、昭和三十七年）三五五頁
(24)同上書、三六五頁
(25)大西　祝「徳育について」（『学林』一〇号、明治二十三年七月）『大西　祝全集』第五巻（警醒社、明治三十七年）所収、復刻版（日本図書センター、昭和五十七年）五〇六頁
(26)大西は明治三十七年出版の『倫理学』では、ギリシア語の ἦθος を「品性」あるいは「心ばえ」という意味をもつとしている。（『全集』第二巻、十一頁）そして、倫理学エティクはエートスから来ており、倫理学は「品性の学」ともいうとしている。（同）さらに品性を「気質、性情及び欲望の組織によりて圍僥され支持さるゝ意志の方向を謂ふ」と定義し、徳は品性に現れたものとしている。（同上書、五十一頁）
(27)ケルン著、山口小太郎訳注『教育精義』（普及舎、明治二十五年）二六七頁
(28)リンドネル著、湯原元一訳補『倫氏教育学』（金港堂書籍、明治二十六年、同三十三年〈十九版〉）一四九頁
(29)同上書、一五二頁
(30)湯原元一「ヘルバルト派教育学説の全盛時代」（国民教育奨励会編『教育五十年史』民友社、大正十一年）一八一頁
(31)谷本富『科学的教育学講義』（六盟館、明治二十八年）五六～八頁

(32)吉田熊次『教育学説と我が国民精神』（目黒書店、昭和九年）四九頁
(33)湯原訳補『倫氏教育学』一七六頁
(34)竹中暉雄『ヘルバルト主義教育学』（勁草書房、昭和六十二年）二七四頁
(35)勝部真長・渋川久子『道徳教育の歴史』（玉川大学出版部、昭和五十九年）七八頁
(36)海後宗臣「近代教育学説の発展」昭和十五年（『近代日本教育論集第八巻　教育学説の系譜』国土社、所収）参照
(37)国木田独歩「富岡先生」『教育界』一巻九号、明治三十五年七月三日（第二文集『独歩集』）四四九頁
(38)夏目漱石『三四郎』明治四十一年九月一日～十二月二十九日「朝日新聞」掲載（『漱石全集』岩波書店、一三頁）
(39)武藤山治『実業読本』大正十四年、日本評論社（『武藤山治全集』第三巻、新樹社、昭和三十八年、所収）参照
(40)藤原喜代蔵『明治大正昭和教育思想学説人物史』第一巻（東亜政経社、昭和十七年）六八四～五頁
(41)スペンサー著、尺振八訳『斯氏教育学』、文部省、明治十三年（『明治文化全集』第十巻、所収）参照
(42)湯原元一「ヘルバルト派教育学説の全盛時代」（国民教育奨励会編『教育五十年史』民友社、大正十一年）一八六頁
(43)なお、「品性」という考え方の定着については、ヘルバルトに影響を与えたカント哲学の存在も無視できないが、それについては稿を改めて論じたい。
(44)ジョン・ラボック原著、外山滋比古・岩元巌訳『ユース・オブ・ライフ―いかに生きるか―』（講談社、昭和五十五年）一七五～六頁
(45)「朝日新聞」昭和六十三年九月二十二日
(46)「毎日新聞」昭和六十三年九月二十四日
(47)吉田静致『倫理学要義』（宝文館、明治四十年〈四十二年訂正八版〉）二八～九頁、一三四～一四一頁
(48)入沢宗寿『教育学概論』（甲子社書房、昭和十二年）二一三～四頁
(49)馬場文翁『道徳教育の研究』（福村出版、昭和四十年）八九～一〇二頁